

発達障害という個性を活かす社会

昨今、医学の発達などによって発達障害の認知度が上がり10人に1人も言われるようになりました。私たちは今、独特の発達特性をもった人たちを含め多様な人々と一緒に社会生活を送っています。これまでの社会は多数派である定型発達者の視点で回っていたため、発達障害の人は少数派として多くの苦労や困難を感じてきたはずで、高齢化で増え続ける認知症の人たちも同様です。

私たちは、「普通ならこれくらいできて当然、一人で何役もこなさないと回らない」と考えがちです。あるレストランの厨房で働いていたA君は難しいレシピの料理を何人分でも黙々と調理する事が出来ました。ある日、接客係が休んだためフロアの仕事をすることがありましたが、お客さんとコミュニケーションがうまく取れずパニックになりました。その後A君はやめてしまいました。

ところで、世の中には個性的な存在が一定割合必要で学問やテクノロジーの進歩には欠かせないのも事実です。エジソン、ダーウィン、モーツァルト、ゴッホなどは実は発達障害だったのでは？と言われていています。発達障害と言われる人の中には定型発達者には思いつかないようなアイデアや独自のやり方で社会に貢献し、新たな時代を拓いた人が数多くいます。

大学にもコミュニケーションは苦手だが1日中プログラムのバグを探したり、3Dプリンターでモノ作りを一心に続ける学生がいます。コロナ禍でタッチパネルでの注文やチャットによる会話が当たり前になりました。また、発達障害は「病気」ではなく「個性」と捉える社会になりつつあります。スマホには多くの機能がありますが、その機能の1割も使いこなせていません。人の能力も同じです。これからは発達障害の人が得意とする能力を発揮し輝ける社会を創るという発想が必要です。発達障害や認知症と診断される人が年々増えているのはもしかすると、これまでとは違った能力を必要とする新たな時代に欠かせないからかもしれません。

深刻な少子化！出生数80万人割れ

厚生労働省が20日に発表した人口動態統計速報を受け、2022年の出生者数が1899年に統計を取り始めて以来初めて80万人割れになるとの予想が報じられました。出生者数は第二次ベビーブームだった1973年の209万人から減少を続け1984年に150万人を下回ります。その後減り方は緩やかになりましたが2016年に100万人を割り2019年に90万人を切りました。

こうした中、21日の教育学術新聞に、今後、定員割れで行き詰る大学が続出する恐れがあると、『深刻な少子化「高等教育の規模」検討始まる』という記事が出ていました。乱暴な言い方をすると役目を終えた大学をいかに混乱なくたたむかという議論です。公的な色彩が強い大学ですが、私立大学は経営が成り立たないと質の高い教育は維持できません。これまでも留学生の獲得やリカレントの充実などに取り組んできましたが所詮パイの奪い合いです。

一方、台湾のTSMCの熊本進出で半導体エンジニア育成が急務とのニュースが話題になりましたが、AI社会を迎える2030年代にはIT人材が50万人以上不足するという経済産業省の予測があります。同様に高度成長期以降に作られたインフラや設備の維持保全人材も不足しており、雇用のミスマッチ解消という視点でも理工系大学の存在価値はまだありそうです。人材不足が心配される新分野の教員確保は大変ですが、例えば、既存の講義の2～3割をAI時代に対応した内容に組み替えれば素早くキャッチアップ可能です。実際、データサイエンスは既存教員が持つスキルをフル活用して対応できました。

このようなスピード感ある取り組みが日本経済にとっても大学にとっても持続可能性の鍵を握ると考えます。人口減少が長く続き課題先進地といえる北九州にある大学として、例えば公害克服の経験をSDGs推進に生かすなど、差別化出来る視点は多いはずで、年末年始、少子化時代に求められる大学の役割に自分ならどうするか、何をスキルアップすればよいか少し考えてみませんか。